

学生が「夏に挑み」



そして正念場の秋へ

教職をめざす学生たち、一般企業を希望する学生たちの熱い戦いがこの夏繰り広げられました。本学4回生で教職に挑んでいるのは約640人、一般企業を希望しているのは約210人、公務員をめざしているのは約70人です。(学生サービス課就職係調べ)

4月1日に出願がスタートした教員採用選考試験は、第1次選考(筆記試験と集団面接など)が7月中旬に、第2次選考(個人面接と模擬授業など)が8月下旬に行われ、10月末までには、結果が発表されます。キャリア支援センターでは、教職教養などの筆記試験の講義、面接のポイントの実演、模擬授業の実演などを指導し、「全員合格」をめざしてきました。

柏原キャンパスでは、6月30日の「教員採用試験必勝セミナー」を皮切りに、夏休み期間には水泳、音楽(歌唱と楽器演奏)、器械運動などの「実技試験対策講座」を実施。実技に自信がなくなり不安を感じている人などが参加し、自信を深めました。

8月中旬、1次選考を合格して、2次選考に向けての指導を受けに教員就職相談室を訪れ

た宮沢優衣さん(養護教諭志望)は、「集団面接、教職教養などの勉強を通じて、大教大の学生であることの強みを実感しました」と、キャリア支援センターの先生方の手厚い指導に感謝の気持ちを語りました。

同じく第2次試験に臨む指導を受けに教員就職相談室を訪れた4人に話を聞きました。

大木雄介君(中学校社会科教員志望)は「面接指導を受けていたお陰で、本番の集団面接でも落ち着いて面接官に対応することができました」。梶谷真弘君(大学院社会科教育専攻)は「筆記試験で事前学習しておいた設問がいくつか出題され、スムーズに解くことができました」。森脇弓子さん(特別支援学校教員志望)は「自分の話したいことを簡潔にまとめることができるようになりました。社会に出ていったとき、あらゆる場面で役立つと思います」。中澤陽子さん(特別支援学校教員志望)は「なにも分からない、一からのスタートでした。話し方ひとつとっても、仲間内の会話ではなく、緊張感のある中で、話ができるように訓練していただきました」と話していました。そして、4人は口をそろえて「同じ教職をめざす仲間と切磋琢磨し、情報交換しながら励まし合ったことが心の支えにもなりました。みんなと一緒に合格したい!」と意気込みを語りました。

2次選考では、個人面接と模擬授業という次のハードルが待っています。4人は模擬授業のポイントをビデオで確認して、

健闘を誓い合っていました。

就職指導室にも、連日学生が訪れていました。長谷川綾さん(特別支援学校教員志望)と、山本翔輝君(高校国語科教員志望)は、面接官からの質問に対する答えや自己PRを、本番ながらに行いました。長谷川さんは「ここで練習したことが集団面接でも出され、落ち着いて答えることができました。また、自信を失いかけたときには、励まされ、癒されました」。山本君は「この部屋に来ると的確にアドバイスしてくれるので、勉強になります。今日の個人面接の練習でも努力不足の箇所がよく分かりました」と話していました。場面指導では、中学校の生活指導の場面を再現し、生徒指導担当教員がやんちゃな生徒を指導する場面をロールプレイ方式で学生自身に実演させるなど、校種や場面に応じて多彩な手法で指導を行っています。

また、天王寺キャンパスでは、教職相談室で、田中達アドバイザーが同じく指導にあたっていました。

大木君 森脇さん 中澤さん 梶谷君 宮沢さん



長谷川さん

西田アドバイザー

File.004

教員養成課程 理科教育講座
教授 福江 純

ブラックホールシャドーの理論研究

「空間の裂け目」それが
ブラックホールです！



大阪教育大学には天文学の研究室が2つあります。研究に携わっているのは教員養成課程理科教育講座の福江純教授と松本桂准教授(天文学研究室)、教養学科自然研究講座の定金晃三教授(宇宙科学研究室)です。柏原キャンパスには、教員養成課程棟のC3棟屋上に「51センチ反射望遠鏡」が設置されています。課程や学科は違いますが、望遠鏡の運用を含めた教育・研究活動は、両研究室が共同で行い、入学した学生も講座の枠を超えて学んでいます。

両研究室からは、ブラックホールが発見されたX線連星、活動銀河核、宇宙ジェットを

テーマに日本でもトップレベルの理論研究の成果が生み出されています。福江教

授の「ブラックホール降着円盤～見えないはずのブラックホールを視る」も、新聞各紙や科学専門誌で大きく取り上げられました。

「降着円盤」とは何か？ アインシュタインの相対性理論で予想された謎の天体、光でさえ出ることができない「空間の裂け目」、それがブラックホールです。ブラックホールは周囲に光り輝く「高温プラズマガスの円盤」をまとい、さまざまな宇宙活動の原因となっていることがわかってきました。これが「降着円盤」と呼ばれています。

光でさえも出ることができない、完全な闇であるブラックホールをどうやって視るのか？「闇夜のガラスも背後から光で照らせば



シルエットが浮かび上がるでしょう。宇宙に存在するブラックホールも、しばしば光り輝くプラズマガスをまとっているの、その光る衣の影絵として視ることができるはず。相対性理論や放射理論などを用いたシミュレーションによって、ブラックホールシャドーの姿を求めることができます」。福江教授は、さまざまなタイプの光る衣をまとったブラックホールのシルエットを明らかにしました。

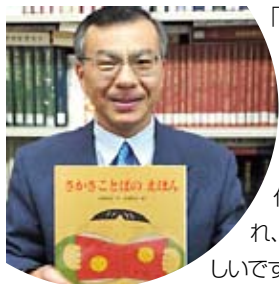
「高校生に関心をもってほしいですから、やさしく分かりやすいように本学の天文学研究の成果を発信することを心がけています」という福江教授は、教育面では「地学Ⅱ」「天文学Ⅰ・Ⅱ」「理科基礎」を担当しています。学生には、「科学全般に幅広くいろいろなことを貪欲に追いかけてほしい。1、2回生のうちに、文章を書く国語力、プレゼン能力、デザインセンス、表現力など、発信するスキルを身につけてほしい」と語っています。

両講座では、星座の観測会などを開催し、学生が一般の人にプレゼンする機会を設けています。

File.005

教養学科 日本アジア言語文化講座
教授 小野 恭靖

ことば遊びや、歌謡史研究に力



「静かに日本語ブームが起きていますが、若い人が身近な日本語、日本文化の面白さにふれ、関心をもってほしいですね」

こう語る小野恭靖教授の現在の研究課題は、日本歌謡史(今様、室町小歌、近世民謡等)、日本芸能史・演劇史(雅楽、能、狂言、三味線組歌等)、ことば遊び(なぞ、しゃれ、回文等)、中世文学(主として室町時代)など多岐にわたりますが、中でも次の2つの研究に特に力を入れています。

一つは「ことば遊びの史的・研究」です。テレビなどで漢字やことば遊びのクイズ番組が人気を呼ぶようになり、なぞかけ芸人が受けています。こうしたことから昔のことば遊びについて、新聞社・テレビ局からコメントや取材、番組協力などの依頼が頻りに寄せられます。最近では「無理問答」の歴史につい

ての問い合わせがありました。これは「一枚なのにせん(千)べいとはこれいかに？」という問いに対して「一個でもまん(万)じゅうというがごとし」と答えるような、一見矛盾する文をかけあって遊ぶ問答のことで、その歴史をテレビ向けに紹介しました。

二つ目は「日本歌謡史の研究」です。各時代の流行歌謡や儀式歌謡、子ども歌などについての研究で、それは時代劇やドラマを製作する際には欠かせない知識でもあります。

この研究から小野教授は、NHK大河ドラマ『利家とまつ』(2002年)、『武蔵』(2003年)に挿入される流行歌や子守歌について選曲を求められました。また最近では、漫画家・水木しげるさんの『鬼太郎がみた玉砕』のドラマ化にかかわりました。丸山二等兵(水木さんをモデルにした登場人物)が玉砕に向かう最期の場面で、仲間の兵士と歌う「くるわ唄」の歌詞とメロディーを調べてほしいとの依頼があったのです。小野教授は、それが江戸時代の「潮来節」からの流れをくむ歌であることを解明しました。

教育面では、学部・大学院ともに江戸時代の変体仮名を学生に読ませる授業を展開しています。また、『万葉集』から『新古今和歌集』、『百人一首』までの和歌366首の中から、学生一人ひとりが自分のテーマに沿って31首を選び『私の和歌カレンダー』にも大きな注目が集まっています。恋の始まりから終わりまで、四季の移り変わりなど、学生自身が気に入った31首(1か月分)を選んで、自分だけの日めくり和歌集を作ります。

「大阪教育大学の学生は、教師になる人もそうでない人も、ことば文化を大切に、次の世代へ受け継いでいくという社会的な使命感を持ってほしい」と小野教授は話します。



次の世代へ受け継いでいくという使命感。



直接触れるという
アクティブな活動を

“モナリザに魅せられた研究家”、“絵を描きながら美術を考える教員”…こんな横顔をもつのが、島影和夫教授です。

現在は天王寺キャンパスの小学校教員養成5年課程に所属し、必修の基礎造形や選択の造形実技の授業を展開しています。「二部には素朴な学生が多いです。授業は図画・工作の基礎・基本を中心に、少人数のフェイス・トゥ・フェイスでやっています。図画・工作は、

絵を描いたりものを創ったりすることを通して、いろいろなことを学ぶ教科です。小学生から中学生、大学生、高齢者までが一緒に学ぶことができます。わたしは、小学生がみても分かる、大学生でも面白い授業をしたいと思っています」

「絵の基本は画面を分けること」…。島影教授の指導方法のエッセンスを約20分の映像に編集したのが、DVD『図画・工作の基本要素と展開』です。本学のデジタル教材プロジェクトにエントリーし、昨秋に制作しました。絵を描くことの始まりを、点・線・面という基本的な形の要素を基にして、画面の分割から始めて少しずつ要素を増やしながら複雑な絵へと展開していきます。実際に幼稚園、小学生、中学生、大学生、一般の方が参加した実験授業が収められ、同時に内容をアニメーション化し、実験授業と組み合わせで編集しています。平面から抽象絵画、具象絵画への展開、さらには立体へ発展していくカリキュラムのエッセンスが集められ、小学校教員として、図画・工作の授業を進めるうえで参考になるポイントがまとめられています。

「図画・工作は、ものに直接触れるという



島影教授作品
「花のゆめ」

アクティブな活動がないと成り立ちません。そこが他の教科と少し違うところです。学校現場では作品への評価は難しいとは思いますが、他と比べない、みんな違ってみんないいという、子ども一人ひとりの個性を見つめることが大切だと思います。絵はおもしろいですよ。図画・工作の指導は頭で考えるだけではなく、楽しく描くことを体験してください」

島影教授は、今年2月、大学の理解を得て、NPO法人「美術の教室」を立ち上げました。「絵を描いたりものを創ったりすることを通して、世代を超えてさまざまな知識や技術の交流をはかる拠点にしたいと思っています」と熱く語ります。



エレクトロニクス分野での
幅広い応用が期待!

ドライアイスが昇華して小さくなり自然になくなってしまふという現象を見た経験は誰でもあるでしょう。しかしボディがマグネシウム合金でできたデジタルカメラや携帯電話が、知らないうちに消えてしまうというような現象は起こりません。これはドライアイスという固体は元々気体の二酸化炭素からなり、一方デジタルカメラのボディを構成する合金は室温で固体状態であるためです。このような金属を蒸発して気体状態にするには、通常

ならば空気が存在しない真空中で数百℃～千℃まで加熱してやる必要があります。

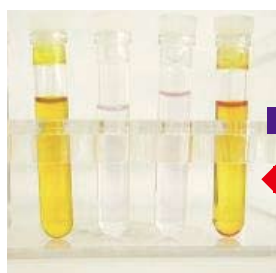
本学自然研究講座の辻岡強教授の研究グループは、三菱化学科学技術研究センターと龍谷大学との共同研究により、本来固体になるはずの金属マグネシウムの原子が、特殊な有機物質の表面に存在するときに室温で容易に「蒸発」してしまうという現象を見つけました。特にフォトクロミック物質という、光を当てると色が可逆的に変化する物質の表面では、色が着いている状態では固体化するのに対して、色が着いていない状態では金属原子が蒸発するという現象を、世界で初めて発見しました。この現象を利用すると、例えばレーザー光線でも有機物質表面における金属原子の固体化と「蒸発」を自由にコントロールできることになります。

特に辻岡教授の研究室の修士課程学生の瀬角祐介さんは、修士論文研究においてこの現象を支配する基本原理の研究を

行い、様々な金属種でこの特異な現象が実現できるということを明らかにしました。この研究内容は、日本化学会欧文論文誌において、月ごとに最も優れた論文に対して授与される「BCSJ賞」を受賞しています。

辻岡教授は現在、文部科学省科学研究費補助金特定領域「フォトクロミズムの攻とメカニカル機能の創出」においてこの研究を継続中で、「この新しい現象は、今後現代科学技術を支えているエレクトロニクス分野での幅広い応用が期待されるでしょう」とコメントしています。

なお本研究内容に関連して、辻岡教授は今年8月27日付で「有機電子デバイス及びその製造方法」の特許を取得しました。



1 地域連携授業で社会貢献起業を学習。 竹肥料商品化トライアルに学生が参加

「地域連携学校教育入門—現代社会を生きる—」は2008年度からスタートした前期の総合基礎科目の授業で、担当しているのは教職教育研究開発センターの關隆晴教授です。

第12回目の7月5日は、「社会貢献起業にどう取り組むか」をテーマに、「Satoyama re-creation」事業について学びました。

この日は、ゲスト・ティーチャーとして「(社) Save Forest」代表理事の鈴木宣仁さんと理事の杉本勇二さんが講義を担当しました。

「Save Forest」は、昔の村落共同体でみられた人々の絆(きずな)を日本全国の里山に育み、広げる活動を展開している一般社団法人です。鈴木さんは、活動の主な柱である「あそびの森事業」「まなびの森事業」「里山プラス事業」について報告し、「遊び」が子どもたちの脳の発達にとって非常

に大切な活動であることを強調しました。また、活動全体の背景となる「Satoyama re-creation」(里山リクリエーション)の理念を解説しました。

一方、杉本さんは、「里山プラス事業」として、中河内地域を中心に取り組んでいる「竹肥料商品化トライアル」事業について説明しました。

「トライアル」は、里山を荒廃させ住宅地にも被害をおよぼす「竹」を、里山再生活動の一環として伐採し、竹肥料や竹パウダー、竹炭などの商品を開発し利益をあげることを目的とした、大阪教育大学生と「Save Forest」の共同商品化プロジェクトです。材料調達から商品開発、販売企画から販路開拓を両者が共同で行うことで、「地産地消」事業モデルであることを社会にアピールし、企業の提携と行政の助成を獲得することを

めざしています。

杉本さんは、ソーシャルビジネス運営のポイントや、起業で「もうける」(利益をあげる)ことの難しさについて経験を交えながら解説しました。

「市場調査はもちろんのこと、何をするのかのミッション(使命、目標)がまず必要です。でも、ミッションだけでは絵に描いた餅。商品をだれに届けるのかという顧客情報、資金調達とコスト意識、だれと事業を展開するのかなど、事業を成功させるためにはさまざまな条件があります。」と語り、「成功させるのは並大抵の努力ではありません。用意周到、緻密な計画が求められます」と強調しました。

この、「トライアル」には、本学から12人の学生がエントリーしました。今後の展開が注目されます。

關教授は「学生たちがこの事業で経験したことは、教職も含め就職しても必ず役に立つ力となります」と話しています。



2 子どもたちを被害者にも加害者にもしない。 犯罪被害者が語る公開授業「命の大切さを考える」を実施

「犯罪被害者が語る公開授業～子どもたちを被害者にも加害者にもしないために～」が7月6日(火)、柏原キャンパスで開かれ、約80人の学生が参加しました。

家政教育講座の鈴木真由子准教授は、「生徒指導論」の中で「いのちの教育」をテーマとした授業を展開しています。今回の講演はその一環として、大阪府との共催で実施されたもので、ゲスト講師の体験談を受け、教員をめざす学生たちが少年犯罪について考えました。講師は、少年犯罪被害当事者の会会員の一井彩子さん。平成7年に、当時中学3年生の長男が隣の校区の中学生と卒業生の4人から集団で暴行を受け、命を奪われるまでの経緯と体験を生々しく語りました。

また、その後、少年刑務所を出所した主犯とその両親の訪問を受け入れ、1年に1度だけ会い続けていることについても話しました。今は、一井さんら被害者遺族等の活動に

より少年法が改正されるなど、改善されてきてはいますが、事件当時は、少年事件の場合、民事裁判を起こさなければ、被害者は事件についてほとんど知ることができませんでした。一井さんも、訪問を受けて初めて加害者の顔を見たそうです。「みんなに恐れられていた主犯の少年が、目の前のおとなしそうな子でした。親に言われないと何もできない、質問しても母親が全部答えてしまう、そんな状態でした」と、対面の様子を語り、「しつけは親の責任。悪いことは悪いと、大人がその都度教えていかないといけない」と訴えました。

そのほか、事件後の心の支えとなってくれた、長男の友人たちについて紹介しました。「大人たちは、報道された『けんかごっこ』を信じて変わってしまったが、その子たちは、息子が生きていたときと同じように接してくれ、一緒に泣いたり笑ったりしてくれています。今でも、子どもができたなど、報告にき

てくれるそうです。

一井さんは最後に、「学校へ出向いて、子どもたちに講演して気になることがある」として、「講演してから、後日、感想文を読ませてもらうのですが、『命は大事だと分かっているが、今はつらい。死にたい』『友達がいじめられているのを助けられず辛い』『誰にも相談できない』などと、苦しい胸の内を明かす子どもたちが多かった」と明らかにしました。そのうえで、「わたしは、講演後のフォローができないので、先生方の対応に期待しています。子どもたちに、人の心の痛みが分かるような、思いやりの心を育ててほしい」と訴えました。

聞き入った学生の一人は「今日の話をしっかり受け止めて教師になりたい」と感想を述べていました。鈴木准教授は「この授業では、『いのち』について学ぶことの意味に加え、臓器移植のジレンマについても考えました。いじめ問題とも関連が深く、学生たちは学校現場に行っても逃げないで、歩んでくれると信じています」と話していました。

STUDENTS NOW!



就職活動で学生のネットワーク

「5年前、ぼくのところに一人の学生が就職相談に来られました。『周りのみんなは就職活動を一生懸命にしているので、わたしだけがどのように活動していいのか迷っています。どうしたらいいのでしょうか』と。

本学は細かくコースが分かれています。ですから一人ひとり就職に対する取り組み方が違います。そういう中で、焦りと孤立感を深めていたようです。そこで、同じ悩みをもつ学生をつなげてネットワークを作ろうと考えました。それがWSDを立ち上げたきっかけです——こう語るのは、キャリア支援センターの川瀬英作キャリア・アドバイザー。WSDのコーディネーターです。

WSDとは、「Working Style of Daikyo」の略。大阪教育大学の学生が、卒業後の人生において望むような生き方ができるように支援する団体です。

発足時は3人でしたが、5年間の活動を経て、現在は3回生を中心に約30人のメンバーが登録されています。団体のモットーは「実践力」。互いに支え合い、切磋琢磨しながら、交流や情報交換を行っています。

具体的には、プレゼンテーション力を育てる「お昼の1分間スピーチ練習」や「集団討論」、コミュニケーション講座などを実施。また、企業に就職した先輩による講演会、4回生による就職活動報告会、夏の合宿、企業現場訪問などのほか、神霜祭(大学祭)プロジェクトにも取り組んでいます。

今年は、企業の新製品開発やマーケティングなどについて学ぶ「段ボール新規製品製作プロジェクト(通称ダン企)」を進めています。その一環として、メンバー13人が7月26日(月)、段ボール製造・販売会社の東栄株式会社(大阪市鶴見区)を訪問しました。



営業部販売課長の松本忠夫さんの案内で、商品説明を受けたうえで工場見学を行いました。その際松本さんは、新感覚の段ボール「ペーパー・ハニカム」を使った新しい商品のアイデアや価格設定などについて、学生目線の企画提案を求められました。これは、工場見学が、忙しい時間を割いて学生を受け入れた企業にとっても、若いユーザーのニーズを吸収するマーケティングの一環となるからです。メンバーたちはそれに応えるため、ディスカッションを重ねています。10月には新規商品案のプレゼンを行い、試作品として採用されることをめざしています。

大教生ならだれでも参加できる「WSD」。主役は学生です。ダン企プロジェクトリーダーの宮崎しおんさん(教養学科文化研究専攻3回生)は「わたしたちと一緒に活動し、楽しみながら進路を切り拓いていきましょう」と参加を呼びかけています。

「今」を今で楽しむ！

学生目線で大学の情報を発信する学生広報グループ「DAIKYO PRESS(大教プレス)」は、「フリーペーパー」を発行します。このフリーペーパーは、広報誌やウェブページだけでは伝えきれない、大教生のリアルなキャンパスライフを発信するために「DAIKYO PRESS」の学生が企画した、学生による学生のための新聞です。

コーナーの企画から取材、編集、デザインまで、すべてを10人の学生が行います。サイズはA4×4ページ(カラー)です。

準備は6月中旬から始まりました。前期試験中や夏休みの間も週1回は会議を行い、大教の魅力を伝えるにはどうすればいいの



「フリーペーパー」制作に挑戦!

か、学生が楽しんでもくれるにはどんな記事がいいのか、といったことを何度も話し合いました。記事の内容には、あまり知られていないサークルや団体の活動紹介、食堂の人気メニューのアンケート、イラスト投稿コーナーなどを企画しています。また、印刷のプ

ロと打ち合わせを行い、印刷・編集など様々なことを勉強しています。

メンバーの学生は皆、「初めてのフリーペーパー作りで戸惑うことも多く、大変だけど、とてもやりがいがある」と話しています。時には記者になり、カメラマンになり、編集者になり、メンバー同士協力しあって制作しています。学生の本音が詰まった記事に、ぜひご期待ください。

DAIKYO PRESSの活動の様子はブログで紹介しています。

DAIKYO PRESSブログ <http://blog.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/dkpress/>



卒業生CATCH!



教育や子育て、現場にこだわりたい。

朝日新聞大阪本社社会グループ 記者
相江 智也さん(37歳)
[教員養成課程 小学校国語専攻 1996年卒]

「やはり、教育や子育て、そして現場にこだわりたいという思いはありますね」

地元・兵庫県の高校教師になろうと大阪教育大学に92年入学。在学中、教師になりたいという気持ちは変わらなかった。それが、今、マスコミの最前線に。

「地元で教職にこだわらなくてもいいのではないかな」。振り返ると、そう思い出した出来事があった。3回生の冬、阪神・淡路大震災で被災した。子どもの頃から過ごしてきた街が一瞬でがれきの山になり、「地元」にこだわることへの迷いが生まれた。時間をかけて将来を考えようと、大学院に進んだ。

研究したいテーマ(言語学、中でも話し言葉

の指導)を基に、大阪教育大学を含めて複数の大学院を探し、神戸大の井上一郎助教授(現・京都女子大教授)に出逢った。井上先生は、指導教官の早川勝廣教授(現・大教大名誉教授)の教え子であることを後で知る。

大学院に入った96年は「生きる力」が教育のキーワードとして注目された年。しかし、学者が描く理想像と、教師になった同級生から聞く現場の話にギャップを感じる。理想と現実の両方に目を向ける仕事として、マスコミへの就職を意識するようになる。

大学院1年目の3月頃からマスコミを中心に就職活動をはじめた。地方紙も受けたが、全国紙にこだわった。2度の挑戦で朝日新聞

社に内定、99年4月から採用される。

記者の1年目は徳島支局で、事件・事故を担当する“警察回り”。2年目からは夏の高校野球などを担当。和歌山支局を経て2004年9月から、大阪本社に。2年弱の奈良総局をはさんで、09年4月に再び大阪本社勤務に。

現在は社会グループの教育班で、子どもの虐待やいじめ、教員制度改革などの取材を手がける。学生時代に読んでいた教育面のコラム「おやじのせなか」も書く立場になった。教育分野以外でも大きな事件・事故や災害があれば、現場に駆けつけることもある。

「大教大には、先生になりたい、教職ひと筋というまじめな学生が多いように思います。果たしてそれだけでいいのか。本当に教師になることが自分や子どもたちにとってベターな選択なのかを一度立ち止まって考えてほしい」

「新聞記者は表には出にくい現場の本音を知り、伝えるのが仕事。教師になった友人らにも意見を聞かせてもらいながら、教育の将来を考えていきたいと思っています。今後も、できる限り、現場に身を置きたい」。教育関係者にとって、出会いの多い記者の一人になりそうである。

「バブル崩壊後の就職氷河期に学生時代を送りました。漠然とした不安の中で、今の世の中、このままでいいのか。普通に先生になるより、世の中にアクションしたい」。そんな思いで、社会のさまざまな現象や構造に目を向ける社会文化コースを選んだ。

JAEは、夢の実現のために挑戦する若者を増やすことを使命に、日本を代表する若手社会起業家・山中昌幸氏が2001年に東大阪市で立ち上げた団体。企業と連携し、学校・地域で実施する仕事体験プログラム(キャリア教育)と、企業やNPOで実施する長期実践型インターンシッププログラム「アントレターン」など、企業と学校、大学をつなぎ、青少年が成長する場を設けていく仕事をしている。

そのJAEに、大学2年生の終わりに出会った。ベンチャー・マインドをテーマにした大学と柏原市との集まりでパネラーとして参加した山中氏の話に共感した。



夢の実現のために挑戦する若者を育成。

NPO法人教育開発協会(JAE)
教育開発兼広報担当
小林 健司さん(27歳)

[教養学科 文化研究専攻社会文化コース 2005年卒]

そこには伏線があった。1年生の夏、「自分の足で日本を見て回ろう」と、自転車で青森から鹿児島まで縦断旅行を敢行。春には1か月、インドへバックパックの旅を実行した。「インドでは日本と全く違う世界に触れて刺激的な体験をしました。いろいろな国を回るつもりだったのですが、『日本という国が好きで、子どもが好き。それなら、教育をテーマに日本で何か自分が感じられることを形にしていきたい』という気持ちが強まりました」

集まりの後の懇親会で山中氏と話した。「ぼくの中で、出口を求めてぼんやりしていたイメージが鮮明になりました」

すぐJAEの活動に参画。3年生になって1年間休学。教室授業に全力を注いだ。2005年3月に卒業後、就職した。

後輩の大教大生に対しては「大学での学び

だけではなく、外へ出て新しい分野に身を投じて体験してみることが必要です。ぼく自身は体験が中心だったので、今は、大学院に入って勉強したいと感じています。実践したからこそ、理論の必要性が強く感じられるのだと思うのです」とメッセージを送る。

JAEの事務所は、「より人が集まりやすいスペースに」と今年5月、新大阪から北区に移転した。新オフィスは、インターンシップで学生を受け入れてもらっている株式会社「森の学校」(岡山県英田郡西栗倉村)がデザインした、西栗倉村で生産されたスギ、ヒノキをふんだんに使ったオフィスである。「都会での田舎暮らしが体感できる、天然素材に囲まれたオフィス」として注目され、今年の「日経ニューオフィス賞」に輝いた。ここで働く20代から30代スタッフのリーダーである。

MY LIFE WORK

〈VOL.1〉

本学名誉教授
長田芳和先生

よみがえれ！きれいで豊かな大和川に

新設の魚道でアユなどの遡上を後押し

「大和川は、日本一汚い川と言われましたが、近年、水質が格段に良くなっています。きれいな川にしか生息しない天然アユが戻ってきたことが、その象徴です」と語るのは、本学名誉教授の長田芳和さん。専門は淡水魚の研究です。長田さんは、国土交通省近畿地方整備局・大和川河川事務所(藤井寺市)に足を運び、アユをはじめ、様々な魚介類が通過する魚道の必要性を説いてきました。その熱意が届き、今年3月に魚道が完成しました。

大和川は、奈良県の旧都祁村付近を源流に、奈良県北部から大阪府柏原市を経て、大阪府南部を東西に流れ、大阪湾に至る大きな川です。下流には河口堰がなく、海・汽水域から遡上してきた魚類は、河口から17.6km付近の柏原堰堤(えんてい)で移動が阻まれてきました。

柏原堰堤は、水位と流れの安定を維持する目的で昭和29年に作られました。今の近鉄「道明寺線大和川橋梁」と、国道170号線・河内橋の間に位置します。幅163m、高さ1.5mで、上流へのぼろうとする魚にとっては巨大な壁となって立ちはだかってきましたが、その堰堤の北側(右岸)に幅6m、長さ63mの魚道が開通しました。魚たちにとってのバイパスです。

この魚道が建設されるきっかけは、長田さんが教授として勤務していた5年前にさかのぼります。卒業論文を指導していた理科専攻の学生4人が、柏原市域の大和川でアユを捕まえ、耳石に含まれる元素を分析して、それが大阪湾から遡上した天然アユであることを確認したのです。天然アユは川で孵化した後に海に降下し、稚魚になって再び川に遡上します。

大和川は、水の汚れを示す生物化学的酸素要求量(BOD)の調査が始まった昭和37年以来、ワースト1~3に定着してきました。両岸に市街化が急激に進み、高度経済成長期には工場・生活排水が流入したことが、汚れの大きな原因となりました。そのために大和川のアユの天然遡上は長い間中断していたのです。

その後、下水道が整備され、周辺住民による河川のクリーン活動などによって水質の汚染値は徐々に改善。平成18年以降は、BODの年平均値が国の環境基準レベル(5mg/L)をクリアし、同21年、観測史上最もきれいな水質(3.2mg/L)を記録しました。(同河川事務所の調査から。グラフ「大和川の水質」参照)

その後、下水道が整備され、周辺住民による河川のクリーン活動などによって水質の汚染値は徐々に改善。平成18年以降は、BODの年平均値が国の環境基準レベル(5mg/L)をクリアし、同21年、観測史上最もきれいな水質(3.2mg/L)を記録しました。(同河川事務所の調査から。グラフ「大和川の水質」参照)

魚道には、形も大きさも違う岩で瀬や淵などが人工的に作られ、自然の川に近い、変化のある河床となっています。様々な種類の魚介類が移動したり、隠れたりできるように配慮されており、淡水魚や甲殻類の習性を熟知している長田さんならではの設計です。



大和川に遡上した天然アユ(提供:大和川河川事務所)

大和川には、20種近くの魚類が魚道へ進入したことを確認しました。アユ、ウナギなどの回遊魚のほか、コイ、オイカワ、カワムツ、ニゴイの仲間などの純淡水魚、モクズガニ、テナガエビなど甲殻類も見つかっています。成長や産卵のため遡上や遡下、あるいは餌を取りに進入したものと見られます。

「魚道を作った効果はしっかりとあることが調査で実証されました。魚道の完成は夢に向けての一步を踏み出したに過ぎません。大和川河川事務所は、天然アユが100万尾遡上する川へと再生することを夢見ています」(工事品質管理官・田辺弘道さん)

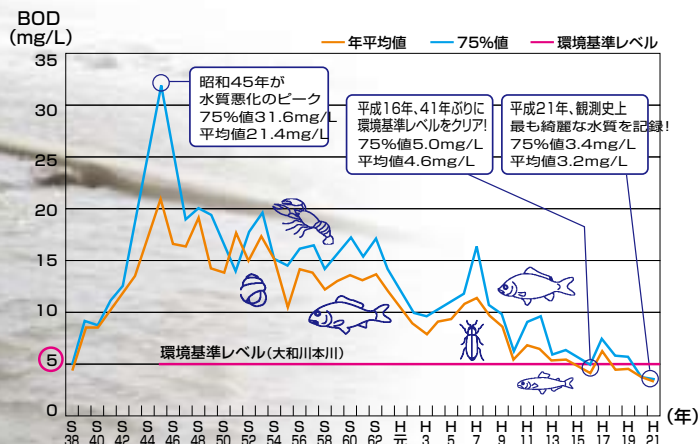
同事務所と長田さんは今後も協力しながら、川の生きものにとって心地の良い河川環境づくりをめざしていくことにしています。「さらに水質の改善がどんどん進み、近い将来、子どもたちが泳いだり、魚を捕ったり、自由に水遊びができる空間にしていきたいですね」と、長田さんは熱い思いを語ります。

新しい魚道が、その懸け橋となってくれるものと期待されています。

大和川の水質 近畿地方整備局 大和川河川事務所

平成16年度にBOD年平均値が5mg/Lを下回る

・平成21年度のBOD年平均値(本川8地点平均)が3.2mg/L



附属学校園ウォッチ

ニュートリノ物理について講演

阪大の高杉副学長、附属高校天王寺校舎「SSH講演会」で

2009年度から5年間、文部科学省からSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)の指定を受けている本学附属高等学校天王寺校舎は、7月17日、同校小講堂で「SSH講演会」を開きました。昨年同時期に行われたIPS研究所長の山中伸弥所長の基調講演会に続いて第2回目の講演会となります。また、PTA公開授業も兼ねていました。

講師は、同校SSH運営指導委員で大阪大学理事・副学長の高杉英一氏です。物理学が専門で、日本が世界をリードするニュートリノの研究者です。演題も「ニュートリノ物理の進展と日本人の貢献」で、同校生徒と保護者ら約160人が参加しました。

最初に畦浩二校長と、大学の附属学校担当の成山治彦理事が挨拶しました。このあと岡博昭副校長からSSHの1年間の取り組みについて報告がありました。

高杉氏の講演は、物理学が苦手な人にもわかるように工夫されていました。まず、自分の少年時代のエピソードから話を始められ、親しみやすい人柄を感じることができました。それから、物理学の分野での日本人研究者の貢献について語られました。

最初は、小柴昌俊博士のカミオカンデ実験についてわかりやすく解説されました。次に、ノーベル賞に最も近い距離にあった戸塚洋二博士(2008年に死去)のスーパーカミオカンデの装置についても触れられました。最後に、ニュートリノ研究者の鈴木厚人博士について触れ、「ニュートリノは地球を楽々と貫通するため、全地球トモグラフィーとして使うことができる。これは画期的な大発見である」と強調されました。

講演の随所で話された「何事も一所懸命がんばっていると、見ていてくれる人が必ず



いる」とのメッセージは、高杉先生の人生訓でもあり、大変印象的で、研究活動に取り組む附高生を大いに勇気づけました。

陸上の朝原氏もセミナーで講演

附属天王寺中学校・附属高等学校天王寺校舎は、6月26日にも生徒、保護者らを対象にした「公開セミナー」を開催しました。

講師は、2008年北京オリンピック男子400mリレーの銅メダリストである朝原宣治氏(大阪ガス株式会社)で、「あきらめなければ夢はかなうー陸上競技人生20年の軌跡」と題して、講演されました。

附属天王寺小学校第1回

「指導力向上のためのワークショップ」を開催

参加者一体の体験型研修を展開

大阪教育大学平成22年度学長特別プロジェクト事業(地域貢献部門)の一環として実施された、附属天王寺小学校主催の「指導力向上のためのワークショップ」が8月27日(金)、午前9時半から午後4時まで開かれました。

学校現場の課題やニーズを受け止め、解決のための道筋を示すために先導的な実践

研究を担う附属学校が、日頃どのような教育実践を積み重ねているのか、体験型の研修を行うもので、大阪府内の公立小学校などから約240人の教員が受講しました。

7教科1領域にわたり、午前13、午後13の計26コマのワークショップが企画されました。講師は、いずれも同校教員が担当しました。国語科では音読や読書指導など、社会科では社会の見方・考え方を深める授業など、算数科では「算数的活動」の工夫など、

理科では観察・実験のアイデアなどを提案。音楽科では合唱指導や「わらべうた」で授業づくり、図工科では、身近な材料を基にした造形遊びや木工、紙工作、体育科では「授業のマネジメント」やゲームの指導経過を紹介しました。また、コンピュータ室では事務処理において必須といえる「初級エクセル」学習に取り組みました。どの教室も、内容の濃い研修を繰り広げ、日頃の授業で課題に感じていることを出し合い、講師や参加者が一体となって解決の道を探りました。

八木義仁副校長は「当初の予想を超えた参加があり、内容についても好評をいただきました。子どもたちの学力向上のため、現場の教員の指導力向上をめざして、来年度もこの時期に開催したい」と話しています。



News Letter

平野五校園共同研究部 池永真義
(中学校研究主任・ニュースレター編集代表)

平野五校園では、今年2月19日の共同研究宣言集会や4月30日の第1回共同研究全体会での活動方針案を受け、広く「平野の教育」を知って頂くためにニュースレターを発行しています(現在第3号まで)。

連携・一貫教育が全国的に広がりを見せていますが、連携をとともう学校研究では、ともしれば研究の全体像や推進者自身のポジションが不明瞭に映り、そのことがモチベーションを下げる要因になる場合もあります。

そこで編集の基本方針として、号を重ねる毎に職員間の相互理解が深まり、めざすべき平野五校園の具体像・バックボーンが浮かび上がってくるよう、活動の项目的な羅列ではなく研究・研修活動の具体的な内容が見える構成にすることを心がけています。

“発信する平野”

『平野五校園共同研究ニュースレター』

実際に編集に取り組んでみて、思っていた以上にその効用を感じています。通信編集・発行という手段が、ワンウェイではなくツーウェイ(双方向)のコミュニケーションの大きな助けとなるのです。とりわけ編集する側は、これまで輪郭が不鮮明だった連携教育活動の一つ一つの取り組みのディテールに魅せられ、かくも人間の成長がこれほど豊かな教育実践の多様性に支えられているのかと、まさに平野が唱える「生涯発達の視点に基づく教育」のリアリティーを実感しています。

拡散的になりがちな連携活動を「編集」す

る作業は、クラスづくりの手段として担任が発行する学級通信と同じ役割を果たすのだと思います。

今後は、初めのページの「巻頭言」を、大学の教員をはじめ、様々なステークホルダーの方々にリレー形式で書いて頂く予定です。また、様々なトピックをインタビューや座談会等の形式でとりあげ、読者が「私ももっともっと勉強してみよう」「こんな実践に挑戦してみようかな」などと一念発起してもらえるような豊かな紙面構成にしていきたいと考えています。

今年度、附属学校園が開催する研究発表会

「平野五校園共同研究発表会」のご案内

平野地区には、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校のすべてが近隣に位置しています。このような強みを活かし、長く柔軟な視野から子どもを育てられる「生涯発達の視点に基づく校種間連携型一貫教育」のシステム研究を進めます。

■テーマ…五校園共同研究主題

生涯発達の視点に基づく校種間連携型一貫カリキュラム
「ことば・体験・コミュニケーション」で「考える力」を育てる
保育・授業創り―アセスメントを活かした支援・指導のあり方を探る―

■とき…平成22年11月6日(土)午前8時25分～午後5時半

■内容…①全体会②公開保育・授業(全教科)③研究協議④シンポジウム

・講師:大阪教育大学理事 成山 治彦氏 他
・コーディネーター:大阪教育大学教授 木原 俊行氏
・後援(予定)大阪府・大阪市・堺市

附属高等学校池田校舎

「平成22年度公開授業研究会」のご案内

■とき…11月26日(金)午後1時半～4時45分

■内容…全体会(研究題目、教科の授業について)/公開授業Ⅰ(保健体育科)・公開授業Ⅱ(総合的学習・国際教育)/研究協議

■テーマ…研究協議「未来社会を築く学び―自立し協同する力を育む教育―コミュニケーション力を基盤として―」

附属高等学校天王寺校舎 SSH研究成果報告会

「平成22年度『科学のもり』生徒発表会」

■とき…平成22年12月18日(土)午前9時半～午後4時

■ところ…大阪教育大学柏原キャンパスA棟

天遊 twitter

てんゆうツイッター

7月末に閣議決定された来年度の概算要求基準では、国立大学法人運営費交付金も一律10%削減の対象となりました。この方針が機械的に適用されると、国立大学全体で1千億円を超える削減額となります。まさに国立大学の存亡にかかわる一大事ということで、国立大学法人関係者は、それから1月余りの間、危惧と憂慮のなかにありました。結果的には、8月末の文部科学省の概算要求

では、プロジェクト経費や授業料免除枠の減等の調整により、既定経費の見直し分はとりあえず1%、84億円(本学においては4千万円超)の減となりました。プロジェクト経費や授業料免除枠の見直し等の一部については、「元気な日本復活特別枠」に要望され、いわゆる政策コンテストに付されることとなりました。9月28日からは、その一環として、内閣官房がパブリックコメントを公募しています。これらの手続きや、財務省との調整等を経て、年末に政府予算案となりますが、この要求・要望がどうなるかはよくわからないというのがいまの実感です。いずれにしても、今年度よりもさらに厳しい状況となることを覚悟しなければなりません。危惧と憂慮は絶えません。(理事・岩川雅士 9月28日記)

国際交流コーナー



台中教育大学 楊思偉学長(右)と握手する長尾学長(左)

台湾3教員養成系大学と交流協定を締結

大阪教育大学は今年度、国立高雄師範大学・国立台湾師範大学・国立台中教育大学の台湾3大学との間で、教育及び学術交流に関する協定書、並びに、学生交流に関する覚書を締結しました。各大学との調印式はそれぞれ4月20日(火)、5月21日(金)、6月25日(金)に執り行われました。

国立高雄師範大学は、台湾南部の高雄市にある大学で、苓雅(高雄市苓雅区)、燕巢(高雄県燕

巢郷)の2つのキャンパスに、文、理、教育、芸術、科学技術の5学部18学科、30大学院(博士課程を含む)、附属高校、中学校、小学校があり、学部生約3,000名、院生約1,200名、教員261名を擁しています。

国立台湾師範大学は、台北にある大学で、教育、文、理、芸術、科学技術、運動・レジャー、国際、音楽の8学部28学科、24の独立大学院を設置しています。日本統治時代の旧制台北高等学校(大正11年創立)の旧校舎を今も使っており、李登輝前総統らが学ぶなど親日的な校風があります。学部生約7,300名、院生7,500名(博士課程を含む)、教員759名を擁しています。

国立台中教育大学は、台中市にある大学で、教育、人文教養、科学の学科15、大学院16研究科(修士12、博士4)を設置しています。学部生約3,102名、院生約1,219名(博士課程を含む)、教員190名を擁しています。

3大学は、いずれも台湾を代表する教員養成学校であり、今後、ダブル・ディグリー制度の導入を含めた積極的な大学間交流が期待されます。

平成22年度前期留学生修了証書授与式

平成22年8月6日(金)、事務局棟4階大会議室において留学生修了式が執り行われ、日本語・日本文化研修留学生3名および特別聴講学生20名に修了証書が授与されました。

長尾彰夫学長、向井康比己国際センター長

からのお祝いの言葉の後、ガイザ エマさん(ドイツ)、ホウ シュンジンさん(台湾)が修了生を代表してあいさつしました。

ガイザ エマさんからは、日本での思い出、お世話になった方々への感謝の気持ち、共に過ごした仲間たちへのメッセージが述べられました。ホウ シュンジンさんは、日本の四季の美しさに触れたこと、特に初めて雪を目にしたときの感動を語っていました。また、それぞれの季節の行事を思い起こし1年間の日本での生活を振り返っていました。

修了生たちは本学での思い出を胸に、それぞれの母国へ帰国します。今後、国際社会での彼らの活躍が期待されます。



修了生を代表してあいさつする
ホウ シュンジンさん

現場からの信頼を受け2年目の好展開

01 大阪教育大学が実施する 教員免許状更新講習



2年目を迎えた平成22年度教員免許更新制の免許状更新講習が7月26日(月)を皮切りに、大阪教育大学柏原・天王寺両キャンパスでスタートしました。申込数(予約)は必修・選択を合わせて計3,175人(7月5日現在)と、昨年実績(2,751人)を大きく上回っています。今年は、西日本だけでなく、全国からも申し込みがあり、多くの受講生が大阪教育大学を選びました。1年目の受講生によるアンケートで大阪教育大学の更新講習への評価が高く、それを裏付けた結果となりました。

今年度は、30テーマの必修講座、42テーマの選択講座を開講。主会場となる天王寺キャンパスは、西館及び中庭の環境が今春、整備され、市民

向けの公開講座のセンター的役割だけでなく、教員免許更新講習、10年研修など、現職教員にとっても重要な場となっています。

受講者は、子どもの学力や子ども理解、特別支援教育の課題、危機対応や学校のマネジメントなど、学校現場で対応を迫られている課題をとりあげた必修講習や、小中一貫した国語科教育の体系化の実践と課題などの選択講習を、電子黒板などの機器が整備された専用会場で受けることになります。

平成19年6月の改正教育職員免許法の成立により、平成21年4月1日から教員免許更新制が導入されることになり、本学では、教育と研究の蓄積を生かした講習を開講。いずれの講習も学問研究の先端的な知識と情報を提供し、これからの教員に必要な最新の知識・技能を身につけることをめざした内容となっています。

9月までは、夏季休業日のウィークデイに行う“集中型”を実施し、10月には土日型も開設しています。

今年度の申込状況が、教員免許更新制を取り巻く不安定な状況のなか、昨年度よりも好調であったことについて、担当の島善信教授(教職教育研究開発センター)は次のように話しています。

「主な要因として2点あると考えています。1つは、昨年度に実施した講習内容に対する高評価が、口コミで広がったこと。2つ目は、近隣の他府県では、開設する講習の規模を縮小した大学が多い一方で、本学では、全体の規模は縮小したものの、昨年と同程度の講習数を提供している関係で、府内だけでなく他府県からの申込者も増加したこと。その他、諸事情があらうかと思いますが、今年度の講習終了後、受講者からのアンケート等から分析をしたいと思っています」

06 オープンキャンパスに 約4,500人が参加

大阪教育大学のオープンキャンパスが7月25日(日)、柏原キャンパスで開かれました。猛暑の中、約4,500人の高校生、保護者、留学生などが参加しました。

今年は、前年度まで行ってきた全体会と分科会に加え「入試ガイダンス」や「専攻等紹介」、大学紹介ビデオ上映を行い、参加者の好評を得ました。また受験生対象相談コーナー、在学生とのフリートークコーナー・クラブ紹介、留学相談コーナー、外国人留学生対象

の説明会なども盛況でした。

大教生による「将来の後輩」を歓迎する催しも注目を浴びました。屋外では、沖縄の伝統舞踊「エイサー」を「いちやりばちよーでーエイサー隊」が、よさこいソーランをダンスサークル「凜凜」が勇壮に演じ、さかんな拍手が送られました。屋内では、身近な物理について楽しく簡単な実験を通して紹介し科学に関心をもってもらう「モダン科学館」、盲導犬とガイドロボットも登場した「アートキャンパ2010:見えない世界で迷路を体験しよう」が行われ、音楽棟では、教養学科芸術専攻音楽コース学

生のオーケストラによるミニコンサートで、クラシック音楽に聴き入りました。

食堂やカフェでは、高校生や保護者の方々が大学側の配布した案内リーフレットに真剣な表情で目を通す光景や、体育会クラブの学生が案内するキャンパスツアーの列があちこちで見られ、柏原キャンパスは終日、ヒートアップしました。

07



携の必要性および重要性について考えるのがねらいです。

プログラムは、ワークショップ・パネルディスカッション・講演の3部構成で行われました。ワークショップでは、現職教員を講師に迎え、現場で取り組まれている授業を参加者自身が実際に体験しました。

パネルディスカッションでは、現職教員のパネリストがビデオで実践を報告、それぞれの経験や専門性に基づいて活発な議論が交わされました。また、講演では、様々な活動例や苦労談、エピソードが語られ、和やかな雰囲気の中にも有益な話に、多くの参加者がメモをとっていました。

参加者は「小中学校での様々な取り組みを知ることができてよかった」「英語を通しての教育活動への情熱が伝わってきた」といった感想を述べていました。本学では、今後も小学校外国語活動について、さまざまなテーマでシンポジウム等を開催することになっています。次回は来年2月初旬に予定しています。

07 小学校外国語活動の 指導法など探る

本学がワークショップなど開催

「これからの小学校外国語活動ー小中連携を視野に入れてー」と題したワークショップとパネルディスカッション等が、7月4日(日)、本学天王寺キャンパス・ミレニアムホールなどを会場に開かれ、小中学校教員や教育関係者、学生らおよそ100人が参加しました。本学が、平成21年度の文部科学省『大学教育・学生支援推進事業(テーマA)大学教育推進プログラム』に採択された『教える「英語力」向上プログラムの構築』の一環として実施されたものです。

来年度に導入される「小学校外国語活動」における効果的な指導法や指導教員のあり方などについて、小学校現場ではさまざまな模索が試みられています。今回は、具体的な英語教育の方法や、地域における小中連

「教える「英語力」向上プログラムの構築」webページ

<http://www.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/kikaku/program/egp/>

本誌にご意見をお寄せください。

広報室では、今後の誌面作りに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたいことなどを、はがきまたはwebアンケートでお聞かせください。

天遊vol.15
webアンケート



「天遊」とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス統合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。記念碑の揮毫は、水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。



本紙は再生紙を使用し、環境にやさしいベジタブルインキで印刷しています。この印刷物は、15,000部を589,050円で、すなわち1部39.27円で作成しました。



＜キリトリ＞

郵便はがき

5 8 2 8 7 0 5

(受取人)

大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学企画課
広報室行

料金受取人払郵便

柏原支店
承認

30

差出有効期間
平成23年9月
30日まで

切手不要



※該当する番号を○で囲んでください

あなたの職業を教えてください

- | | | |
|---------|---------|-----------|
| ①本学関係者 | ②高校生 | ③小学校教員 |
| ④中学校教員 | ⑤高等学校教員 | ⑥教育委員会関係者 |
| ⑦他大学教職員 | ⑧他大学学生 | |
| ⑨その他() | | |

①と答えた方は以下から該当する番号をお選びください

- | | | |
|---------|----------|----------|
| ①学生 | ②大学教員 | ③大学職員 |
| ④大学保護者 | ⑤大学卒業生 | ⑥附属学校生 |
| ⑦附属学校教員 | ⑧附属学校保護者 | ⑨附属学校卒業生 |
| ⑩名誉教授 | ⑪その他() | |